環状に並ぶ十二本の柱の内側には、階段付の小建築が置かれており、その壁面には、蓋の開いた空の墓に腰掛ける天使、それを訪れる三人の女性、傍らで眠る兵士たちを刻んだ浮彫がある。図像学的には、これは新約聖書のキリスト復活の場面、「三人のマリアによる聖墳墓訪問」の場面を表わしている。この集中式聖堂は、実は聖墳墓聖堂と呼ばれ、聖地エルサレムにあるキリストの墓を模した「擬聖墳墓」なのである。現にその周囲には、キリストを裏切る聖ペトロを暗示する鶏の像など、キリストの受難を再現する舞台装置が設えられている。復活祭週間には、ボローニャの「エルサレム」たる聖ステーファノ教会を中心に市内を巡る信者の行列が組まれ、ボローニャは一時、イタリアの「エルサレム」と化す。中世の古文書でボローニャがしばしば「エルサレム」と形容されるのは、まさにこのためなのである。

歴史を学ぶ目的は、πの暗唱のように膨大なデータをストックすることでも、雑学王になることでもない。現代の世界に無数に存在する〝テクスト〟—紙に書かれた文字のみならず、図像や都市、出来事も含む—を読み解く術を身につけることにほかならない。いまこの瞬間に自分の眼に映る事物を、時間的な奥行きのなかで理解する、モノの観方を体得することだと言っても良い。完成図のないジグソーパズルを解くのに似て、このような解読を積み重ねるうちに、事柄の全容、つまり「意味」が次第に浮かび上がる。確かに歴史を知ることで、民族紛争など現代的な問題に対する処方箋を手に入れることもできる。しかしそれ以上に、物事を歴史の遠近法のなかで見つめ、人間社会の歴史を読み解いていく営みそのものが、真に良識ある人間を鍛え上げていくのである。大学で人文知を学ぶことの意義は、社会での即座の有用性にあるのではない。中世ボローニャ大学がそうであったように、問題の全体像を見定め、百年先を見据えて社会を善導しうる英知を備えた人間としての素養を磨くことにこそある。

新入生には、眼前の世界が秘匿する壮大な「意味」の全貌を、歴史を観る眼をもって、自ら解き明かしていって欲しいと思う。

ちば・としゆき　一九六七年生まれ。東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授。ドイツ・ヨーロッパ中世史、歴史補助学。主な論文に「幽閉と「政治的無害化」の作法—「間」の歴史学から見た中世ポーランド」（『東欧史研究』30号）、共著に『西洋中世学入門』（東京大学出版会）、『信仰と他者—寛容と不寛容のヨーロッパ宗教社会史』（東京大学出版会）、『歴史的ヨーロッパの政治社会』（山川出版社）などがある。

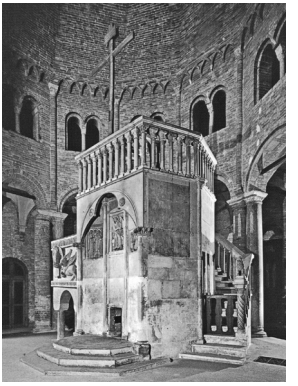
歴史のすすめ

千葉敏之

アペニン山脈とポー川の間に位置するイタリア中北部の町ボローニャは、ヨーロッパ最古の大学を擁する大学町として知られる。中央駅を出て、この町固有の屋根付き柱廊（ポルテイコ）を一キロメートルほど南下すると、市の中心ピアッツァ・マッジョーレに至る。町の守護聖人に献堂された聖ペトロニオ教会の威容が際立つ、この広場の東南角には、アルキジンナジオと呼ばれる一六世紀建造の大学旧校舎がある。ナポレオン統治下の一八〇三年、大学は東のザンボーニ通りに移され、現在では市立図書館として利用されている。

創立期のボローニャ大学には定まった校舎はなく、教師の私邸が教室であった。教師と学生の学びの姿は、市立中世博物館地下に展示される、教師たちの石棺・墓碑に施された浮彫（レリーフ）と銘文から窺い知ることができる。とくに法学で名声を博したボローニャ大学（正式名称はAlma mater studiorum＝「諸学問の滋養溢れる母」）には、ヨーロッパ各地の名家の子弟が集まったが、その隆盛はアルキジンナジオの回廊壁に所狭しと並べられた夥しい数の楯状紋章が物語っている。このように、都市ボローニャには、中世以来の歴史が、当時そのままの姿で、あるいは時代の変化を経た姿で、刻み込まれている。まるで〈記憶の回廊〉を歩くように、都市を歩けば歴史が姿を現す。

アルキジンナジオから東南東の方角へ入り組んだ路地を抜けていくと、三角形をした風変わりな広場に出会う。その底辺部分には、三つの聖堂が横一列に並ぶ、これまた個性的な聖ステーファノ教会が佇む。三つ並びの聖堂群の中央にある八角形の集中式建築の堂内の、



聖ステーファノ教会内擬聖墳墓